

卒業論文雑誌

藤 原 了 然

(一)

毎年、秋風の訪れと共に、学内の卒業論文ブーム（ムードといった方がいいかも知れない）がおこる。その中心拠点が、図書館であり、各研究室であることはいうまでもない。春のどかに、憂ものうく閑古鳥の鳴いていた研究室は、この時を機としてその様相を一変する。総括的にいえば、その実質をなすものは緊張感といつていいであろうが、実態は各人各様まことにバラエティに富むものがある。

四年間の修学期間が、すでに三年半を空費（？）したという感懐は、その程度の差こそあれ恐らく学生諸君に最も共通するものであろうか。それと共に、後、半年足らずで、とにかく卒業の締めくくり要件——卒業論文——をなんとかしなければならぬという、緊迫感（焦燥感といった方が当っている場合もあろうか？）も、まずは萬人（学生）共通のものではなからうか。

厳密にいえば、個性や能力の生得の差があり加うるに、三年有半歳の日々の積上げの如何は、現実的にはかなり個人差を生じていることはいうまでもない。従つて、この個人差の貯水の上に投ぜられた卒業論文という投石がまき起こす波紋は全く百花燎爛という外は

ない。時節到来と腕を撫するグループをAクラスとするならば、愕然として本を手にし図書館通いと研究室訪問を開始するのをB・C・Dクラスに配当すると、茫然自失そのなすところを知らざるもの（こういう人はないはずであるが）をEクラスとでもいうべきであろう。

(二)

人間の考えることは（特例はあるが）大てい相場が決つたものである。今の卒業論文でいうと、日数の関係もあろうが、まずは十中八・九の人たちが考えることは、なすべく労少くしてまとまりやすい（従つて採点の結果もいいことになるはず）テーマを選ぶことになることに多くの例外はないはずである。

ものは考えようであるが、大たい（殆んどが）仏教のブの字を知らない（そういつては失礼に当る学生諸君の多いことは事実であるが）人々に、三年や四年で、論文という学界通念に該当するにふさわしいアルバイトをせよというのが、そもそも無理ともいえる。然し、学制といもので、修学の期間や修学方法が規定されている以上、この教育コースのルールに従つて、出来るだけの成果をあげなければならぬことは否むべくもない道理である。

終戦後の教育に関する組織や制度の劃期的変革、荒廃した教育設備に加うるに社会的大混乱から漸く脱出期を迎えた、親愛且善意に満ちた学生諸君が、真剣に卒業論文と取りくんで、辞書や原典と首つびきでいる姿を目前にするとフト目頭があつくなくなることがある。時には少し手伝つてあげたいと思うことも再三である。

然し、視野を転ずるならば、この努力が、多くの場合、学者諸君の苦しくもまた美わしい生涯の思出になるのである。そして亦たその成果は恐らく学生諸君の終生の人生生活の指針となるのである。学校で学んだことは実社会には一向役に立たないなどという俗語は、自己の怠慢を弁護する煙幕か、学問の意義を知らざる徒輩の、ソラゴトでありタワゴトにすぎない。そこで、古諺の伝える、獅子はその児を千仞の谷に蹴おとすというようないさましきはないにしても次のような言葉が出る。

(三)

焦眉の急ということがある。飢えたるものにはパンを与え、寒気におののくものには衣服の支給を先行条件とすべきである。学校が採点制をとり、卒業論文の作成期間が限定されている限り、その実効をあげるためには最短距離を選ぶことは当然であろう。そこではとんど例外なしに考えられるのは、安易(？)なる道である。いいかえれば特殊な問題をテーマとしてとりあげることが流行する。これは極めて賢い(？)方法ともいえる。

けれども学問というものの本来の意義からするならば、それは諸事象の本質又は原理の探究とこれが闡明をその本務とすべきである。浄土宗学にしても仏教史学にして仏教学にしてもこの区分そのものが適當であるかどうかは問題であるが、いわゆる本筋を究明すべきであろう。法然上人の口称念仏の提唱は、その表現的な特異性にも拘らず、実質的には一化仏教の帰結すなわち出世の本懐であるところに、その教説の不変の真理性と不滅の価値が認めらすべきであろう。歴史的分野に於ても、戸籍膳本的な伝記の究明はただ資料的意義を出でないものである。仏教学的分野に於ても、いわゆる訓詁註釈がその全部であつていいはずはない。

近世に於て、学界の心ある人々によつて、仏教学にしても各宗々学にしても、①歴史的部門、②原理的部門、③実践（応用）的部門というように大別が試みられ、これら三部門が密接不離な關係に於て、綜合的成果を樹立することが肝要視されていることは、注目に値することといわなければならない。然し、言うは易く行ふは難しで、こういう構想に於て、仏教を學ぼうとするとそれは決して生やさしいことではない。三年や五年はおろか、生涯を傾注しても尙事足るとはいえないはずである。全体と部分との関連について、常に大所高所に立つて不絶の反省を試みると共に、細心の注意と不断的努力の累積なくして、事の成就しうるような性質のものではない。勿論、部分的な綿密さなくして大局の正しい把握の出来る道理はないが、要領よく、もつと極言すれば、うまくお茶をにごすといったようなことで、かりそめにも、學問の世界を伺ひ知つたというような錯覚を起しては困ることも甚しいものがある。ラツキヨの皮むきという皮肉な表現があるが、學問に關係するものの陥りやする弊を恰もよく突いたものといえるであらう。詰れば井戸から水を汲もうというような愚かしさは避けられるべきである。卒業論文をすでに提出された学生諸にとやかく因縁をつけようという魂胆はいささかもない。心から望むところは、学生諸君が、直接体験せられた、生々しい論文経験とその成果に鑑み、仏教学の本来の姿、並に人間教養の蓄積の理想態の深遠さについて再思反省を願いたいと思うのみである。結婚生活は結婚式をスタートするように（恋愛の墓場論では困る）學問は大学卒業に於てスタートすることを心してほしいのである。卒業を意味するコメントが、開始とか事のはじまりを内容としていることは味いふかいものがある。切に努力と情勢の継続不斷なことを祈る。このことのみが卒業を意義づけるものであらうから。